Jean Calvin『共観福音書註解』における聖定と摂理　～受肉～

OD　森川　甫

はじめに

１．研究目的

本研究は、ジャン・カルヴァンの『共観福音書註解』の根本原理を追求することを目的とする。共観福音書とヨハネ福音書は 1555 年に別々に刊行され、同年合本として出版された。Jean Calvin[1], *Concordance de l'Harmonie* ..., 1555[2]（略号：『註解』）のマタイによる福音書 26 章において、ordonnance という語を十数箇所発見した。それらを引用し、考察する。

「聖定論」が十全な形で確定したのは『ウェストミンスター信条』（1647 年）であるのでこの発見した ordonnance を一応「聖定の思想」と名付ける。聖定論は〔ラテン語〕decretum, decreta, 〔英語〕decree, decrees というように単複両形で表されるが、筆者は、フランス語では現在のところ複数形は見出していない。「聖定の思想」は広く聖書全般に見出されると思うが、聖定論の概観に触れた後、カルヴァンの「聖定の思想」の特徴を新・旧約聖書註解に求めていきたい。これらの考察は、今後行う『福音書註解』における「聖定の思想」考察の序説としたい。

２．研究方法

フランス語圏におけるカルヴァン研究の第一人者 Richard Stauffer[3]は François Wendel [4]の『カルヴァン　彼の宗教思想の源泉と発展』[5]と、Willhelm Niesel の『カルヴァンの神学』[6]を第二次大戦後のカルヴァン研究の出発点であると指摘した。この Wendel の研究は過去のカルヴァン研究を吟味評価し、文献実証的に研究する方法を示して、『キリスト教綱要』における古代教父、宗教改革者たちの影響を研究している。この研究方法を参照したい。二十世紀末近くになって、Richard A. Muller はカルヴァンに対する広範な研究をなし、宗教改革者たちから神学思想を受容し、『キリストと聖定論』[7]について優れた研究を行っている。この研究を参照したい。

３．先行研究

- François Wendel, *Jean Calvin, et l'Institution de la Religion Chrétienne avec sa sources et l' évolution de sa pensée religieuse*, Paris, P.U.F., 1950.

- Herman Bavinck, *Our Reasonable Faith*, Eerdmans Pub Co, 1956. 松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』（上）（下）、聖恵授産所出版部、1984 年。
- Richard A. Muller, *Christ and the Decree: Christology and Predestination in Reformed Theology from Calvin to Perkins*, Washington, DC, The Labyrinth Press,1986.
- 春名純人『『ハイデルベルグ信仰問答』講義』聖恵授産所出版部、2003 年。

４．テキスト

Jean Calvin, *Concordance qu'on Appelle Harmonie Composee de trois Evangelistes, asçavoir S. Matthieu, S. Marc, et S. Luc ; avec les Commentaires de Jehan Calvin*, Paris, Bibliothèque Nationale de France, 1555.

- 拙訳、『カルヴァン・新約聖書註解I　共観福音書・上』新教出版社、1984 年。
- 山本功訳、『カルヴァン・新約聖書註解III　ヨハネ福音書・上』新教出版社、1963 年。

Jean Calvin, *Institution de la religion chrétienne*, Paris, 1559.

- 渡辺信夫訳『カルヴァン・キリスト教綱要』新教出版社、1964 年。

５．「聖定」（ordonnance）の発見

共観福音書注解マタイ 26 章において「聖定」の語を 10 数箇所発見した。『ウェストミンスター信条』（1647 年）において「聖定論」が確定し、「正統神学」の重要な教義となるが、カルヴァンの聖定の思想のキリスト論的、救済論的特徴を指摘し、カルヴァンの聖書注解書にその存在を例証した。本論では、この『共観福音書』においてその根底に聖定があること、そしてイエス・キリストの救いの御業が摂理として行われていることを考察したいと思う。

I.「共観福音書」と「ヨハネ福音書」

１．「ヨハネ福音書」

１−１．「序文」

マタイ、マルコ、ルカ福音書はキリストのみわざを夫々の独自の仕方で的確に表現しており、ヨハネは奥義を示しているので、まずヨハネ福音書から読むべきであるとカルヴァンは主張している[8]。

まず、カルヴァンは福音について次のように説明している。「福音という名称が、ギリシ

ャ人たちにどんな意味をもっていたか、すでに十分に知られていることである。事実、聖書においても（中略）わたしたちのためキリストのうちにあらわにされためぐみの幸福なよろこばしいおとずれを、意味するものとして用いられている。それは、この世とこの世の空虚な財宝と悦楽をさげすみ、心を傾けて、くらべるもののないこの祝福を追い求め、さし出されるままに自分のものとすることを、わたしたちに理解させるためである」[9]。さらに、「キリストがこの世に来たことの、意義とみのりをあかし立てている教えは、他の著者たちよりもこの著者〔執筆者注：ヨハネ福音書記者〕[10]において、はるかにあきらかに示されている。四人ともおなじように、キリストを知らせることを目ざしているが、前の三人〔マタイ、マルコ、ルカの福音書記者〕が、こう言えるなら、むしろ肉体を知らせているのに、ヨハネは霊を知らせているのである。だから、わたしは習慣として、こう言うことにしている。この〔ヨハネ〕福音書は、他の〔共観〕福音書の理解の扉を開く鍵である、と。それというのも、この福音書にいきいきと描かれているままに、キリストの徳を会得するひとはだれでも、次にあかしされているあがない主について他の福音書の著者たちから教えられることを、真に有益に読みとることができるからである」[11]とカルヴァンはこの福音書の奥義、霊的な書であることを教えている。

また、「神は福音書の四人の著者たちが、それぞれ自分の担当部分をわけもちながら、全体としてひとつの十全なものを完成するよう、なにを書くべきか、かれらに口授したのである」[12]とヨハネ福音書と共観福音書が一つの霊的な口から語られていると主張し、「だから、わたしたちも、この四つをたがいに緊密に結び合わせながら、すべてをいわば、ひとつの口から同時に語られたものとしてうけとらなければならない。順序のうえでヨハネが四番目におかれているのは、かれの書いた時期によったものである。しかし、読む時には、逆の順序の方が有益であるだろう。マタイやその他で、キリストがわたしたちのため父から授けられた者であることを、自覚しながら読むことができるように、キリストがどのような目的で世にあらわれたか、まずヨハネから学び知るべきだろう」[13]と述べて、ヨハネ福音書の持っている重要な意義を指摘している。

１−２．ヨハネ福音書 1 章 1 節から 3 節の注解

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（ヨハ1：1−3）

「この冒頭で、キリストの永遠の神性が示されている。キリストが、肉となって現われた永遠の神であることを、わたしたちに知らせるためである(Ⅰテモ3 : 16)。福音書の著者はこう言おうとしているのである。人類は、神の子によって回復されなければならなかった。それというのも、すべてのものは、彼の徳によってつくられたし、ただ彼だけが、すべての被造物に生命と生気を吹き込み、それらを存在させており、また、かれは、とくに人間において、かれの徳と恵みの優れた証拠を示し、アダムの反抗と失墜の後にも、子孫に対して、なお寛大と慈愛の心を示しつづけたからである、と。これは、十分に会得されなければならない教えである。それというのも、生命も救いも、神より他に求めてはならないが、もしここに教えられていることを、決定的なこととして信ずるのでなければ、どうしてわたしたちの信仰を、キリストのうえに基礎づけることができるだろう。だから、福音書の著者は、これらの言葉を通じてこう証言しているのである。イエス・キリストを信ずる時には、永遠で唯一の神からは少しも遠ざかっていない。それに、人間は、現在その罪のために死んだ者であるが、かつてその本性が十全であった時にも彼の生命の源であり、原因であったキリストの恩恵によって、生命は彼に回復されるのである」[14]と述べて、カルヴァンはキリストが永遠のはじめにおいて、神と共におられたこと、そして、全くの叡智そのもので三位一体の神であることを指摘している[15]。

１−３．三位一体の神　イエス・キリスト

春名純人は『ハイデルベルグ信仰問答』第二五問に対して、次のような三位一体の成立についての緻密な解説を行っている。「三位一体論は『神が御言葉において啓示された』真理である。神は唯一である。（中略）無限者なる神を有限者なる人間が、あるがままに（即且対自的に）認識することはできない。創造者なる神を被造者なる人間が、あるがままに認識することはできない。聖なる神を罪ある人間が、あるがままに認識することはできない。これは神の不可把捉性といわれるものである。しかし、神は人間の救いに必要な限りの知識を完全に御言葉啓示において啓示して下さっている。また神は救われた神の民が神の栄光のために生きるために必要な限りの知識を啓示して下さっている。神が人間の救いと救いの達成のために必要な限りの知識を自己紹介して下さっている。それが神の把捉性といわれるものである。その限りわたしたちは神を創造主、贖い主として正しく認識するように務めなければならない。信仰とは神が救いのために啓示されたすべてのことをみな真理とみなす確実な認識のことである」[16]。

一方、バヴィンクは三位一体について、次のように考察している。「永遠なる神は、三位一体的存在のしかたによって、ご自分を、そのもろもろの属性によるよりも、さらに豊かに、生き生きと現しておられる。彼の本質存在のおのおのの属性がその本領を得るのは、いわば、その最も十分な内容を得、その最も深遠な意味を持つのは、この聖なる三位一体においてである。この三位一体について考える時にのみ、われわれは、神がだれであり、どういうかたであるかを知るのである。さらに、その時にのみ、われわれは、神が失われた人類にとってだれであり、どういうかたであるかを知るのである。われわれが、このことを知りうるのは、彼を父と子と聖霊なる三位一体の契約の神として知り、告白する時のみである」[17]と三位一体の重要性について指摘している。そして、「われわれの信仰告白のこの〔三位一体に関する〕部分を考察するに当って、特に必要なのは、聖なる敬虔と幼な子のような畏敬の念が、われわれのアプローチと態度の特性となることである。（中略）このような聖なる畏敬の念は、御言葉においてご自分を三位一体の神として啓示しておられる神をあかししようとする時には、われわれにも必要なものである。（中略）それゆえに、聖なる三位一体の神という信仰箇条は、われわれの信仰告白の中心また中核であり、われわれの宗教が他の宗教と異なっていることを示している特徴であり、すべてのまことのキリスト者たちの賛美であり、慰めである」[18]とバヴィンクは三位一体の教理について解説している。

２．『共観福音書』の特質～「梗概」

２−１．福音の御業

カルヴァンは、『共観福音書』の「梗概」で、福音について次のように述べている。まず、「福音の確実で、明白な定義を得ることのできる箇所」[19]としてローマの信徒への手紙を引用し、「この福音は、神が、預言者たちにより、聖書のなかで予め約束されたものであって、み子に関するものである。み子は（肉によれば）ダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死からの復活により、み力をもって神のみ子と定められた」（ロマ1：2−4）とパウロが述べていることを示している[20]。さらに、福音とは「み子が滅びの状態にある世の人々を救い出し、人々を死から生へ回復させるために、『肉において現れた』（Iテモ3：16）のみ子を厳かに公表すること」[21]だと述べている。そして「福音は、その中に完全な至福を含んでいるので、良き知らせ、あるいは、喜ばしい知らせと名付けられている」[22]とカルヴァンは指摘している。カルヴァンは、「肉体の堕落が廃され、聖霊によって私たちは再生されたので、私たちを天の栄光に導くために、ここで私たちのうちに神の支配を始めることが、その

目的だ」と述べ、「それはしばしば『天国』と呼ばれており、また、キリストによってもたらされた至福の生活への再生は、時として『神の国』と呼ばれている。それは、〔アリマタヤ出身の〕「『ヨセフは神の国を待ち望んでいた』（マコ15：43）とマルコが述べる時、メシヤの来臨を意味している」[23]とカルヴァンは指摘しているとおりである。そして、「『福音』という語が本来、新約聖書の時代に属しているということは明らかであり、また、それはあらゆる時代に共通すると言って、預言者たちが使徒たちと同様、福音の奉仕者であると考えるのは、幾分か言葉を混同している」[24]とカルヴァンは述べている。「キリストがいかに仲保者の務めを遂行されたかを述べている四つの物語が、特に福音書という題をもっている」[25]理由について次のように主張している。「私たちの救い全体は、キリストの誕生、〔十字架の〕死、復活にあり、また、これらの事柄は福音の固有の主題でもあるので、キリストがいかにして父なる神から送られてきたかを私たちに語り、また、キリストを至福の創造者として私たちが信仰によって認めるように、主イエスを私たちの目の前に示す人々を「福音書記者」と名付けたのは、適切で、かつ、正しいことであった」[26]。このようにカルヴァンは福音の内容を説いている。

２−２．福音書記者

カルヴァンは、「ヨハネと他の三人の福音書記者との間には大きな違い」があることについて、「ヨハネはキリストの力と務め、また、そこから私たちが得る利益全体を示す以外は、ほとんど何もしていない」とし、一方「他の福音書記者たちは、私たちのキリストが世の贖罪主として約束されていた神のみ子であるという、ただこの一点をさらに強く力説している」と指摘している[27]。また、福音書記者の主要な目的は、「父なる神が世の初めに約束されたことがイエス・キリストにおいて成就したということ」を述べることであり、「福音書記者たちは私たちにキリストを指で差し示して、『律法と預言者』によって彼に与えられていることをすべて彼のうちに求めるよう、私たちに勧めているのである。それ故、福音書を読むことは、昔なされた約束と結び合わすことを知るとき、私たちにとって有用で、また、有益なことになる」とカルヴァンは主張している[28]。さらにカルヴァンは、この三人の福音書記者の間にある違いについて、「偶然になされたのでは決してなく、神の摂理がすべてを導いたので、このような方法の多様性があったけれども、聖霊は主要な事柄に関しては、一つの良い一致を彼らに示唆したのである」[29]と述べている。梗概の末尾では、『共観福音書』の方法論について、ブッツァーからの受容と交流によって、カルヴァンの研究が進められた

ことが述べられている[30]。

このように、動機と目的、また福音の内容について極めて適切にこの梗概は語っている。ヨハネが福音の奥義について語っているのに対して、さらに三人の福音書記者がこの福音の詳細をそれぞれの仕方で、しかしながら共に聖霊によって導かれて真の福音について語っているのである。

II. イエス・キリストの受肉　～聖定から摂理へ

１．摂理　～キリストの救いの御業の展開・創世記におけるメシア預言

「初めに天地を造り給うた」（創 1：1）。この「初め」とは、歴史的秩序である。天地が創造され、人も創造された後、人は不従順を行い、神の命令に背き、罪に陥った。創世記では、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」（創 3：15）という神による宣告において、この堕落した人間に対する最初のメシア宣言がなされている。

２．聖書箇所

２−１．イザヤ書 7 章におけるメシア預言

「見よ、あなたはみごもって男の子を生むでしょう」（ルカ 1：31）

天使はその言葉をマリヤが一層理解しやすいように、最初にイザヤの預言「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザ 7：14）から引用し、さらにダニエルやミカの預言が述べられていることを示している。さらに、「この言葉を述べているとき、天使は特に処女マリヤだけに語ったのではなく、暫くのちに全世界に告げ知らされる福音を語った」[31]ことをカルヴァンは指摘している。そして、「イエス・キリストの来臨についての昔の預言と天使の言葉との間の、これほど大きな一致や適切な表現をここで見て、すべてがこのように神の御計画によってたてられ、導かれていることを認めよう」[32]、とカルヴァンは読者に注意を喚起している。

２−２．受胎告知　ルカ福音書 1 章 26 節

「六か月目に、天使ガブリエルが、神から遣わされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとに来た。」（ルカ 1：26）

「御自身のみ子の誕生よりも、先触れにすぎないヨハネの誕生を際立ったものにされたのは、人間の通常の判断とは全く異なった神の計画の驚くべき配剤である」[33]。つまり、「ヨハネの出生に関する預言は聖所でなされ、すべての人々に告げられたけれども、キリストの出生の約束はユダの小さな町にいる一人の処女になされ、このおとめの心のなかに隠されたままになっている」[34]ことは、パウロが述べているように、「神は愚かさによって信じる者を救うこととされた」（Iコリ 1：21）ことが成就していることをカルヴァンは教えている。神は適当な時期にいと高い神秘の宝がすべての信仰者に伝えられるための「秘めておくやり方は軽蔑すべきで、適当でないように見えるが、しかしながら、信仰の謙遜さを試みるためにも、よこしまな人々の高慢心を抑えるためにも、極めてふさわしいものである」[35]とカルヴァンは認めている。そして、「主が一人の男のいいなづけとなっている処女を選ばれた」理由は、「『ヨセフの子』と一般にみなされていた方（ルカ 3：23）が、時が経つにつれて、信仰者たちによって神の子と認められるように、世間の人々の眼をおおうために用いられた」[36]ことだとカルヴァンは指摘している。

「恵まれた女よ、おめでとう」（ルカ 1：28）

天使が最初に神の恩恵について考察している理由は、「神の伝言は感嘆すべきことであり、ほとんど信じ難いことだったからである。私たちの精神の能力はその尺度が小さく、神のみ業の限りない偉大さを理解するには余りにも狭すぎるので、最良の解決手段は私たちの精神を高め、限りない神の恩恵を考察させることである」[37]とカルヴァンは述べている。「このように人間に対する神の恵みを感じ、認識することは信仰の入口であるから、天使が処女マリヤに対してこの順序を用いている」理由は、「マリヤの心を広げるために神の恩恵について思いを深めさせ、次に、理解を超えた神秘を受け入れさせている」[38]ためだとカルヴァンは指摘している。パウロが神と私たちとの和解についてエフェソの信徒への手紙を参照し、「神は愛するみ子によって私たちを心にかなう者とみなして下さった。つまり、神は私たちを恵みによって受け入れて下さり、かつては神の敵であった私たちに恵みを差し伸べて下さった」[39]とカルヴァンはパウロの言葉から教えている。この比類極まりない受胎告知は、まさにパウロが述べているように「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるため」（エフェ 1：6）である。

２−３．イエス・キリストの誕生

「そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。（これは、クレニオがシリアの総督であった時に行なわれた最初の人口調査であった。）人々はみな登録するために、それぞれ自分の町へ帰って行った。ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出てユダのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。それはすでに身重になっていたいいなづけの妻マリヤと共に、登録するためであった。ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた」。（ルカ 2：1−7）

「ルカは出産の近づいている母、マリヤがよその土地の住人であるのに、どのようにしてベツレヘムの町でキリストが生まれることになったのかを語っている」[40]。すなわち、「ヨセフとマリヤが彼らの家を出て、家系と血統に従って登録するために、この土地にやって来たと述べて、ルカはこのことが人間的な考えや企てによってなされたのではない」とカルヴァンは説明し、マリヤがベツレヘムで出産するため、「キリストが生まれなければならぬ土地まで、目の見えない人に対するように、神は彼らの手をひいて導かれたことが明らかに分かる」とカルヴァンは神の摂理を明らかにしている[41]。起こった事柄を偶然に起こったかのように単純に考えるべきではなく、「むしろ、直ちに、預言者がこれより数百年以前に預言したことを思い起こすべきである」[42]とカルヴァンは指摘している。「この二つを比較してみると、カエサル・アウグストゥスがこの人口調査をせよと布告し、ヨセフとマリヤが彼らの家を出て、出産寸前にベツレヘムに着いたことは、神の驚くべき摂理なしには起こりえなかったことが容易に分かるであろう」[43]とカルヴァンは述べている。さらに、神の聖なる僕たちが、彼らの行動とその結果を分からずに、「彼らの企ての中でさ迷っているけれども、神が彼らに道を示して下さる限りは、正しい道を歩んでいるのを私たちは幾度か見ている」[44]とカルヴァンは指摘し、こうして「預言が成就されるために、この圧政的勅令がマリヤを彼女自身の家のある土地から出立させたことにも、やはり、神の驚くべき摂理が表わされているのである」[45]とカルヴァンは示している。さらに、ユダヤの人口調査によって神に捧げていた年貢を、皇帝に納めるために登録するよう命じたアウグストゥスを不敬虔な人物であり、「神がその民から受けとっていたものを横領」しているとカルヴァンは指摘している[46]。そして、「状況がこのような極限に至り、ユダヤ人たちが神の支配から永遠に疎外され、取り除かれているかのように見えるとき、神は突然、皆の期待に反して、いやしに来られるだけでなく、神の民を贖うために、呪われたこの圧政をも用いられる」[47]とカルヴァンは説いている。さらに、「カエサルに用いられていた者は誰でも、その職務を果たすことにより、

そのことを考えずに、神の先触れ、あるいは、ラッパとして用いられ、マリヤを神が予定された土地に来させた」ことを指摘し、ルカが述べている物語は、すべては、「母の胎にいるときから、神によって導かれた（詩篇 22：10）ということを、信仰者たちに知らせること」が目的であるとカルヴァンは指摘している[48]。「預言されていたごとく、贖罪主がマリヤから生まれるように、マリヤが突然、また、彼女の希望に反して、ベツレヘムに引っぱって行かれたということを知る」ことが私たちの信仰の確信のために重要であることをカルヴァンは教えている[49]。

２−４．謙卑の極地において行われた誕生

「客間には彼らのいる余地がなかったからである」（ルカ 2：7 ）

「ヨセフのひどい貧困さだけでなく、この勅令の残酷さ、厳しさがここでうかがえる」[50]と彼は述べて、次のように解説している。ヨセフは妻の分娩のことを心配しながらも、他にとるべき方法もなく、臨月の間近い妻を連れて行かねばならず、さらに、王家の血筋をひく者が他の者よりもひどい扱いを受けていたことは実際ありえた。そのため、ヨセフは神の前に頭を垂れ、加護を祈り求めるしかなかったのである[51]。

ここで、「神のみ子がこの世にどのようにして入って来られたか、また、母の胎から出て、どのように住まわれたかが分かる」とカルヴァンは述べ、「み子がこのような状態でお生まれになったのは、私たちのために『おのれをむなしうして』（フィリ 2：7）私たちの肉体を身につけられたからである」と語る[52]。そして、カルヴァンは次のように説いている。み子は家畜小屋に送られ、飼葉おけに寝かせられ、快適な宿屋で産まれることを拒否された。それは、私たちが一時的に滞在する宿としてではなく、永遠に住む国として、天が私たちのために開かれ、また、天使が私たちを彼らの住居に受け入れるためである[53]。

こうして、神の比類のない御図らいの中で、あらゆる地上的な栄華を退けて御子はこの世にお生まれになったのである。

２−５．最初の礼拝者　羊飼い

カルヴァンは次のように羊飼いについて述べている。「天の父が初めはキリストに神の輝きを表わさなかったというほど、この世に生まれたばかりのキリストが全く栄光を欠いていたというわけではなかった。というのは、天使たちは救い主が生まれた（ルカ 2：11）ということを告げたが、彼らの声は羊飼いにしか聞かれなかったし、また、さらに遠くへ伝わ

らなかったからである」[54]。

「さて、羊飼いたちがよる、野宿しながら羊の群れの番をしていた。」（ルカ 2：8）

「キリストがベツレヘムにお生まれになったとしても、もしも、世の人々に知られなければ、何にもならないであろう」[55]。そして、カルヴァンは次のように注解している。ルカは神の採られた方法が、人間の判断とは非常に異なっているように見えるよう記している。つまり、キリストの誕生はごく少数の人々にのみ知らされ、しかも、それは夜の暗やみのなかである。次に、神は証人として用いるのに、尊敬され、優秀な多くの人々を除いて、世間からは尊重されていない身分の低い、羊飼いたちのみを用いられた。それ故、肉的な理性や知恵はここでは全く役に立たず、人間にとって知恵であり、また知恵のように見えるものは、「神の愚かさ」（Iコリント 1：25）にも到底及ばないということを必ず知らなければならない。さらに、キリストが「おのれをむなしうされた」（フィリ 2：6）は、その光栄を減じるためではなく、しばらくの間、それを隠すためであった。さらに、パウロが警告しているように、福音は肉によれば軽蔑すべきものであるが、私たちの信仰が人間の知恵の素晴らしい言葉とか、世界の何らかの光や外観によるのではなく、聖霊の力によって築かれる（Iコリント 2：4,5）ためである。だから、神が初めから、この測り知れない「宝を土の器に」（IIコリント 4：7）おかれたのは、私たちの信仰の従順さを試すためであることを理解しなければならない。それだから、もしもキリストのもとに来たいならば、世の人々の高慢を打ち砕くために、家畜の糞の上にいる人々を、私たちの教師として主が用いておられるのを恥とすべきではない[56]。

「いと高きところでは、神に栄光があるように」（ルカ 2：14）

「天使たちは感謝、つまり、神賛美から始めている。なぜならば、聖書はまた、私たちが死から贖われたことを口によっても、行為によっても神に感謝するように、至る所で述べているからである」。そして、神が独り子によって私たちを御自身に和解された最終目的は、神の恵みと限りないあわれみの豊かさを示すことによって、み名がたたえられるためである、とカルヴァンは説いている[57]。

このように、受肉と御子の誕生はまさに謙卑の状態の中で行われた。謙卑の中で地上の栄華を一切排除して行われた。

III. 教理の展開　～「聖定の思想」

受胎告知、受肉に対して、古代教父や宗教改革者たちから、カルヴァンは様々な受容と交流を受けた。

１．エイレナイオス

カルヴァンの著作におけるエイレナイオスからの引用はアウグスティヌス、クリストストモスほど多くはないが、それでも若干の引用がある。エイレナイオスとカルヴァンには大きな共通性がある。一つは異端との戦いであり、二つ目は共に徹底して聖書に基づいて論争していることである。「神が本当に人の子となった」ことに関してエイレナイオスは、福音書およびパウロ書簡を参照し、マタイ、パウロ、ルカ、ヨハネ、そしてイエス自身の証しによって論証している[58]。

２．F. ヴァンデル

F. ヴァンデルは、『ジャン・カルヴァン「キリスト教綱要」における彼の宗教思想の展開』[59]において、古代教父、宗教改革者からの受容と交流に関して、貴重な研究をしているが、本稿ではカルヴァンから直接・間接に指導を受けた『ハイデルベルグ信仰問答』を参照する。

３．『ハイデルベルグ信仰問答』

『ハイデルベルグ信仰問答』は、受肉について次のように説いている。

〈第三五問〉「主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生まれ」とは、どういうことですか。

〈答〉今も、後も、真実の永遠の神であり給う、神の永遠の御子が、聖霊の働きによって処女マリアの肉と血から、真の人間性をお取りになったということであります。それは、主もまた、ダビデの真の子孫となり給い、罪を別にしては、あらゆる点で、兄弟たちと等しくなり給うためでありました[60]。

さらに、この『ハイデルベルグ信仰問答』第三五問に対して、春名純人は次のような核心をついた考察を行っている。「処女マリアの肉と血から真実の人間性をお取りになった。人間の身体と霊魂を持つ真実の人間になられた。人間の身体を持っておられるように見えただけでもなく、また、神の霊が人間の身体に宿っているだけでもない。真実の人間性を取る

とは、人間の身体と魂を取るということである」[61]。

４.『キリスト教綱要』(1559 年版)

「『言葉は肉体となった』と言われているが(ヨハネ 1 : 14)、これを言葉が肉体に変化したとか、言葉が肉体と混然と混ぜ合わされたかのように理解してはならない。むしろこれは、御言葉が処女の胎を宮として選び、そこに住み、神の子なる方が人の子となられた、それも実体の混合でなく位格における統一によってである、との意味である。我々の主張する神性と人性の結合と統一はこうゆうものであり、神性も人性も損なわれることなく、それぞれの固有性を保ち、しかも両者が（二つの別々の位格でなく）一なるキリストを成り立たしめるということである。このような崇高な奥義を喩えるものが人間に関する事柄の中にもしあるとすれば、人間そのものこそ最も適切であると思われる」[62]とカルヴァンはキリストの神性と人性について説いている。

さらに、「神の子が同一なままで人の子となり、我々のものを御自身に受けて御自身のものを我々に移し、また本性上彼にあるものを恵みによって我々のものとするのでなければ、誰がこのことを為し得たであろうか。そこで、生まれながらの神の子が我々の体を取って自らの体とし、我々の肉を取って自らの肉とし、我々の骨を取って自らの骨とし、こうして我々と同一の者となって我々に固有であったものを引き受けることを厭わず、その逆に彼に固有であったものを我々に及ぼし、このようにして彼も我々も共通に神の子また人の子なるが故に自分が神の子であると確信するのである」[63]とカルヴァンは指摘している。さらに、「聖書は至る所で、神の子は我々の肉を取ることを欲し、この命令を御父から受けたもうたのは、我々のために御父を宥める犠牲になるためである」[64]と述べ、キリストが受肉され、この世に来られたのは、我々を救い、御父を宥めるためであったことをカルヴァンは示している。

また、キリストの受肉について、「キリストが『ダビデの子』と呼ばれるのは（ローマ 1 : 3)、ダビデに約束され、遂に時満ちて現されたもうたという意味に他ならないと論じる。だが、『ダビデの子』と言う後には続けて、『肉によれば』と付け加えられるのだから、パウロは確かに人間としての本性のことを言おうとするのである」[65]とパウロ書簡を参照しつつ、カルヴァンは指摘している。

永遠の初めからキリストは共におられ、その御業をなされた方なのである。

５．H. バヴィンク

バヴィンクはキリストの神性と人性について次のように述べている。「はじめに神と共にあり、自ら神であったあの永遠の言が肉体となったのは、キリストにおいてであった（ヨハネ 1：1、14）。彼は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であり、すべての御使たちよりもすぐれたかたであるだけでなく、彼らに礼拝するように要求することもできたかたであり、とこしえの神、とこしえの王であり、いつも変ることがなく、そのよわいは尽きることがない（ヘブル 1：3-13）。彼は富んでおられ（IIコリ 8：9）、神のかたちを持っておられるので、本質においてだけでなく姿と状態と栄光においても父と同じであった。彼は、この神との平等性を固守すべきこととは思わず（フィリ 2：6）、かえってそれをかたわらに置いておいて僕のかたちをとり、人間の姿になられた（フィリ 2：7、8）、そのように天からとられたのであるから地に属する人であるアダムとは対照的な主として高く上げられたのである（I コリ 15：47）」[66]。

バヴィンクは、キリストの人性について次のように解説している。「キリストは神であられたし、また今も神であられるし、また永遠に神であり続けられる。彼は父ではなく御霊でもなく御子、実のひとり子、父の愛する御子であった。また、御子は神的本質存在ではなく、すなわち父でもなければ御霊でもなく、時が満ちるに及んで人となられた御子であった。そして、彼が人となり、人として地上を歩まれた時、ゲツセマネで苦悩し、十字架につけられた時でさえ、父が喜ばれる（全く満足される）神のひとり子であり続けられた」[67]。

また、キリストの受肉が「地上におけるキリストの御業の初めであり序論ではあるが、その御業の目的のすべてでもなければまた最も重要な目的でもない」[68]ことをバヴィンクは指摘しつつ、次のように受肉の意味を示している。「神のかたちであられ父のふところにおられたひとり子が人のかたちをとられたということは、人類にとって非常に名誉なことである。なぜなら、このことによってすべての人がキリストと関連づけられるからである。彼はすべての人と同様に肉と血とに共にあずかっておられ、両者はお互いに魂と体、頭と心、思いと意志、もろもろの理念と感情を共に備えておられる」[69]。これに続いて、受肉の出来事の霊的、道徳的交わりとの混同を警告しつつ、血のつながりと霊の交わりが隔たっていることを指摘している。そして、「受肉は和解また贖いの行為の初めであり、その準備であり、それへの導入であって、それ自体ではない」[70]とバヴィンクは注意を喚起している。

キリストは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」「アルファであり、オメガである」（黙 1：8）とあるように、永遠のはじめにおいて神とともにおられた御子であって、

神とともに聖なる定めをなされた方である。バヴィンクは「旧約時代に御霊を預言者たちに与え、御霊をとおしてご自分の来臨と御業をあらかじめ知らせまた予表されたのは、キリストご自身であった。イエスのあかしびとであるイエスの預言者たちの心にあるイエスのあかしは、彼らが預言の霊を持っていることの証拠である（黙 19:10 ）」[71]と述べて、この多彩な御子の誕生の出来事を通して、常にキリストがおられることを示している。

結び

カルヴァンの『共観福音書註解』は「聖定」の思想がこの根底に流れており、救いの御業が摂理として豊かに激しく展開している。

時間的、歴史的摂理の中では、カルヴァンは『共観福音書註解』の「梗概」において、キリストの福音と３人の福音書記者の特徴のある優れた記述を紹介した。本論文執筆者は、ルカ福音書をテキストにして「受肉」について考察してきた。そこでは、エイレナイオス、カルヴァンが直接、間接に指導した『ハイデルベルグ信仰告白』、『キリスト教綱要』最終版、必要ならばカルヴァンの他の註解書、また、オランダの代表的な改革派教義学者 H. バヴィンクをも参照した。回る羽独楽のイメージを借りるならば、永遠のはじめから終末に向かう聖定が中心棒として、さらに摂理がその中心棒の周りを激しく回っていることを、カルヴァンの福音書注解において考究することを試みている。

参考文献

- Ioannis Calvini, Evangelium Ioannis Commentarii, Paris, 1555.
- Ioannis Calvini, Harmonia Ex Evangelistis Tribus Composita Matthaeo, Marco, et Luca, Commentarii, Paris, 1555.
- Jean Calvin, *La Concordance qu'on appelle Harmonie composée de trois Evangelistes, asçavoir S. Matthieu, S. Marc, et S. Luc. avec les commentaires de Jehan Calvin*, Paris, Bibliothèque Nationale de France, 1555.
- Jean Calvin, *Institution de la religion chrétienne*, Paris, 1559.
- 拙訳、『カルヴァン・新約聖書註解I　共観福音書・上』新教出版社、1984 年。
- 山本功訳、『カルヴァン・新約聖書註解III　ヨハネ福音書・上』新教出版社、1963 年。

- 渡辺信夫訳『カルヴァン・キリスト教綱要』新教出版社、1964 年。
- 春名純人著『『ハイデルベルク信仰問答』講義』聖恵・神学シリーズ 36、聖恵授産所出版部、2003 年。
- 小林稔訳『エイレナイオス 3　異端反駁III』キリスト教教父著作集 第 3 巻I、1999 年、教文館。
- François Wendel, *Jean Calvin, et l'Institution de la Religion Chrétienne avec sa sources de l'évolution de sa pensée religieuse*, Paris, P.U.F., 1950.
- Herman Bavinck, *Our Reasonable Faith*, Eerdmans Pub Co, 1956. 松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』（上）（下）、聖恵授産所出版部、1984 年。
- Richard A. Muller, *Christ and the Decree Christology and Predestination in Reformed Theology from Calvin to Perkins*, Washington, DC, The Labyrinth Press,1986.

---

[1] Jean Calvin, 1509-1564.

[2] Jean Calvin, *La Concordance qu'on appelle Harmonie composée de trois Evangelistes, asçavoir S. Matthieu, S. Marc, et S. Luc. avec les commentaires de Jehan Calvin*, Paris, Bibliothèque Nationale de France, 1555.

拙訳、『カルヴァン・新約聖書註解 II　共観福音書・下』新教出版社、近刊。

[3] Richard Stauffer; 元フランス国立高等研究院院長。

[4] François Wendel ; 元国立ストラスブール大学プロテスタント学部学部長。

[5] François Wendel, *Jean Calvin, et l'Institution de la Religion Chrétienne avec sa sources de l'évolution de sa pensée religieuse*, Paris, P.U.F., 1950.

[6] Willhelm Niesel, *Die Theologie Calvins,* 1938, Chr. Kaiser Verlag, 改訂版の邦訳、渡辺信夫訳『カルヴァンの神学』新教出版社、1960 年。

[7] Richard A. Muller, *Christ and the Decree Christology and Predestination in Reformed Theology from Calvin to Perkins*, Washington, DC, The Labyrinth Press,1986.

[8] 山本功訳、『カルヴァン・新約聖書註解III　ヨハネ福音書・上』新教出版社、1963 年、「序文」参照。

[9] 同上、9 頁。

[10] 引用内の甲括弧〔　〕は、執筆者注とする。

[11] 同上、10 頁。

[12] 同上、11 頁。

[13] 同上、11 頁。
[14] 同上、13 頁。
[15] 同上、9-11 頁。
[16] 春名純人著『『ハイデルベルク信仰問答』講義』聖恵授産所出版部、2003 年、94-95 頁。
[17] Herman Bavinck, *Our Reasonable Faith*, Eerdmans Pub Co, 1956. 松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』(上)、聖恵授産所出版部、1984 年、243 頁。
[18] 同上、243－247 頁。
[19] 拙訳、『カルヴァン・新約聖書註解Ⅰ　共観福音書・上』新教出版社、1984 年、9 頁。
[20] 同上、9 頁。
[21] 同上、10 頁。
[22] 同上、10 頁。
[23] 同上、10 頁。
[24] 同上、10 頁。
[25] 同上、10 頁。
[26] 同上、10 頁。
[27] 同上、10 頁。
[28] 同上、10-11 頁。
[29] 同上、11 頁。
[30] 同上、12 頁。
[31] 同上、39 頁。
[32] 同上、39 頁。
[33] 同上、36 頁。
[34] 同上、36 頁。
[35] 同上、36 頁。
[36] 同上、36-37 頁。
[37] 同上、37 頁。
[38] 同上、37 頁。
[39] 同上、37 頁。
[40] 同上、92 頁。
[41] 同上、92 頁。
[42] 同上、92 頁。
[43] 同上、92 頁。
[44] 同上、92-93 頁。
[45] 同上、93 頁。
[46] 同上、93 頁。
[47] 同上、93 頁。

[48] 同上、93 頁。
[49] 同上、93 頁。
[50] 同上、95 頁。
[51] 同上、95 頁。
[52] 同上、95 頁。
[53] 同上、95 頁。
[54] 同上、37 頁。
[55] 同上、95 頁。
[56] 同上、95-96 頁。
[57] 同上、99-100 頁。
[58] 小林稔訳『エイレナイオス 3　異端反駁Ⅲ』キリスト教教父著作集　第 3 巻Ⅰ、教文館、1999 年、77-87、91-97 頁。
[59] François Wendel, *Jean Calvin, et l'Institution de la Religion Chrétienne avec sa Sources de l'évolution de sa Pensée Religieuse*, Paris, P.U.F., 1950.
[60] 春名純人『『ハイデルベルグ信仰問答』講義』聖恵授産所出版部、2003 年、150 頁。
[61] 同上、152 頁。
[62] Jean Calvin, *Institution de la religion chrétienne*, Paris, 1559. 渡辺信夫訳『キリスト教綱要　改訳版』新教出版社、2007 年、525 頁。
[63] 同上、506 頁。
[64] 同上、509-510 頁。
[65] 同上、521 頁。
[66] Herman Bavinck, *Our Reasonable Faith*, Eerdmans Pub Co, 1956. 松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』（下）、聖恵授産所出版部、1984 年、44 頁。
[67] 同上、124-125 頁。
[68] 同上、137 頁。
[69] 同上、138 頁。
[70] 同上、139 頁。
[71] 同上、52 頁。